

(様式1)

「未来の担い手育成プログラム研究校」実績報告書(2年次)

1 学校名等

学 校 名	京丹後市立弥栄中学校				校長名	関 利彦
研究教科・領域等	総合的な学習の時間					
研 究 主 題	課題解決学習をとおして深い学びにつながる授業展開と仲間と協働し自己肯定感を高め、未来を拓く力を付ける					
研究の目的	課題解決学習をとおして、生徒の自己肯定感を高め、未来を拓く力を付ける。					
学 年	1年	2年	3年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	2	1	2	2	7	20
児童生徒数	42	41	30	7	120	

2 研究校の概要

(1) 本校生徒の実態と研究課題

全校生徒が、与えられた課題については実直に取り組むことができる。しかし、自分の思いや考えを発信することに苦手意識をもつ生徒が多い。そこで、あらゆる教育活動の中で「他者の意見を踏まえ、自分の意見をもち、発信する力を身に付ける。」ことを心掛け、研究を進めてきた。

総合的な学習の時間では、仲間と協議したことを披露する機会をもつことによって、少しずつテーマに迫る探究活動ができるようになってきた。また、今年度はコロナ禍で外部講師の助言を基にアイデアを練り直す機会が昨年より減ったが、新たな発想を学ぶために地元の方の講話を実施することや、生徒が作成した発表資料等に対して京都府教育委員会指導主事からの指導助言を受けるなど工夫しながら取組を進めてきた。

(2) 研究体制

研究主任を中心に学年主任と連携しながら研究活動を進めてきた。今後は研究活動をいかに日々の授業に生かすかについて研修だけではなく、各授業の交流も進めていく必要がある。

(PBL 研究会議構成メンバー 研究主任、教務主任、学年主任、校長、教頭)

3 主な研究活動

(1) 課題提起ガイダンス (今後の研究、探究していく課題についてのガイダンス)

探究していく課題「丹後地方の特徴を生かした地域活性策を含めて、多くの人が訪れるための方法とは」と今後の学習の流れの確認

(2) 京丹後市の観光についての課題分析

丹後の観光、丹後王国についての情報収集及び本市の課題分析（丹後の観光産業の弱点、問題点等についてウェビングマップ法を用いた分析を実施）

(3) グループ毎のテーマ設定

集客のターゲット（家族、外国人、若者、ファミリー、地元の人）の設定、仮説の構築

(4) 講話学習

講話「地元の魅力を生かした柔軟な発想力と企画力」～走る木のキャンピングカー～

時代のニーズに合わせ、商品を開発してきた地域の方から、地元の魅力を生かした柔軟な発想力と企画力について学ぶ。

丹後木工 社長 田畑 淳次 様、京丹後市地域おこし協力隊 稲本 真也 様



(5) 学年でのグループブース発表



(6) 丹後の活性化に向けたグループ毎の仮説に基づく課題解決

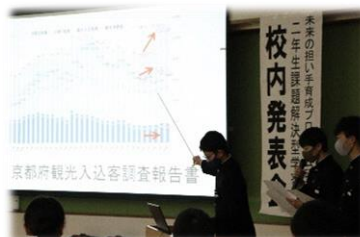
- ・マスコットキャラクターの作成、イベント等の案づくり
- ・丹後王国を訪問し、丹後の魅力をPRするためのCMづくり（事前にグループでCMの流れを考え、動画撮影を実施）



(7) 校内発表会

グループ毎の発表と他のグループのでき栄え評価

ちらしづくり | マスコットキャラクター



4 今年度の研究の成果と検証

(1) 生徒の変容について

- ・コロナ禍において、体験活動は昨年ほどできなかったが、講話学習、情報機器や文献等により探究してきたことを基に結論や推論する力が芽生えてきた。
- ・生徒が多面的な見方をしていくことによって考え方の視野に広がりを見せ、論理的な思考につながっていった。仲間との関係づくりにも反映し、意見の相違があっても折り合いをつけながら良好な関係を維持しながら諸活動ができるようになった。
- ・生徒が相互評価をすることにより、丹後活性化に向けた提案がより課題解決につながる具体的なものとなった。
- ・校内発表会に参加した1年生が、課題解決型学習に向けて見通しをもつことができた。

【1年生感想】

「私は今日の発表を聞いて、2年生がこれまで頑張ってきたことがすごく伝わってきました。丹後を発信するため1年生も学んできたけど、それよりも2年生はレベルの高い発表でした。特にPR動画がすごいと思いました。ひとつひとつの班がいろんな人をターゲットにして、訪れるための方法がすべて違うのですごいと思いました。私たちも来年このプログラムをやるので、聞いたことを生かして頑張りたいです。」

(2) 教職員研修と授業改善

- ・校内で教職員研修を年間2回実施した。研修で学んだことを基に、課題解決型学習を日常の単元計画の中に設定し、授業改善につなげようと努めた。特に、知識を教え込むといった生徒にとっての受動的な授業ではなく、生徒自らが課題を発見し、解決のために主体的・協働的に学ぶ授業づくりに意識して取り組んだ。
- ・令和2年度弥栄学園生徒アンケート（弥栄中学校）

アンケート項目	肯定的解答
●授業中、友達と話し合い学習をよく行っている。	91%
●友達の前で自分の考えや意見を発表するのに慣れた。	72%（昨年度より9%増）
●自分にはよいところがあると思う。	68%（昨年度より6%増）

(3) 広報活動

子どもたちが、今後身に付けるべく資質・能力として認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむことが必要となることや、与えられた知識の習得だけでは激動する世の中を生き抜けないことを学校だよりや学級通信等で発信した。

(4) 小学校との連携

課題解決型学習をとおして、深い学びを目指すには、小学校での基礎基本の定着なしにはいかなないこと等を保幼小中一貫学園授業研究会で交流した。



5 今年度の課題

主に総合的な学習の時間で取り組んできた課題解決型学習について、各教科等の授業にどう生かしていくのかという視点での研究は不十分であった。今後、教科横断的な指導につなげ、深い学びとなるよう研究を進めていかなければならない。また、研究を進めるに当たって、生徒の学力実態の分析や具体的で見通しのある計画の作成等学校全体で取り組む必要がある。

(1) 課題解決型学習につながる授業改善

総合的な学習の時間の年間指導計画だけでなく、各教科の年間指導計画も課題解決型学習につながる授業改善の視点で見直し、年度当初から計画的に取り組を進めていく必要がある。中心となる総合的な学習の時間においては、オリエンテーションから中間発表、計画の練り直し、改善検討、校内発表会をイメージできるよう期日と作業内容と時間を計画する。

(2) 生徒に身に付けさせるべき力

生徒の実態として、発信することを苦手とする生徒が多い。自信をもって根拠となるものと論拠となるものを合わせ、結論を導けるような力の育成が必要であると考え。そのため、「文面を正確に読み解く」「定義をしっかりと理解する」「正確に答え合わせをする」等に必要な読解力を各教科等の授業をとおして身に付けさせたい。

(3) 生徒の学びの検証

習得の有無を検証するには、定期テストだけでなく、授業の中で生徒が実感できる振り返りの機会を設定する。考えた結果が条件を満たしているのか等、熟考させる機会を意図的に設定していく。また、生徒の学力状況を分析、検証するための方法を明確にしておく必要がある。

6 3年次の研究構想

(1) 授業改善の視点

今年度、探究した結果を整理、分析し、発表した経験により、様々な教育活動においても意欲的な態度で臨む生徒が増えた。従って、この実践を更に積み上げ、生徒が仲間と協働して、正解のない問いに対する解決策を見出そうとする力を身に付けさせたい。そのため、以下のアからエを昨年度と同じく指導の基本に据えることに加えて、5点目となる教科横断的な指導につなげ、研究を深めていきたい。

- ア 探究したことに自らの体験や習得した知識・技能を組み入れ、結論に導く指導を行う。
- イ 生徒の仲間との協働的な学び合いをとおして学力の向上を図る。
- ウ テーマについて多面的な見方や考え方を広げ、論理的な思考ができるように指導する。
- エ 先輩からの助言を基に研究を深め、後輩に研究の成果を伝える機会を設定して、生徒の自己肯定感を高める。
- オ 課題解決型学習を教科横断的な指導につなげ、深い学びとなるよう研究を深めていく。

(2) 研究成果の波及

来年度2学期に開催予定の京丹後市授業研究会において、市内全小中学校に対して公開授業を行う。総合的な学習の時間だけでなく、各教科における実践も紹介していく。研究をとおして、未来を拓くために身に付けるべき資質・能力を生徒に習得させることを目指していく。